

1940年代後半に見られた精神神経用剤の新聞広告とその背景

○五位野 政彦<sup>1</sup>(<sup>1</sup>東京海道病院薬)

【はじめに】第二次大戦後の薬物乱用の時代と、違法薬物(非合法ドラッグ)横行の現代の医薬品をとりまく社会状況を比較する目的で、昭和20年代における新聞紙上にみられた精神神経用剤の広告を調査した。今回は不眠症治療薬の広告を中心にした。

【方法】朝日新聞縮刷版(1947年-1949年)に掲載された、熟眠剤アドルムの新聞広告を調査した。同時に、終戦後の1940年代後半に掲載された精神神経用剤の新聞広告ならびに2003年に発売された睡眠改善薬ドリエルの新聞広告についても調査した。

【結果】アドルムは1948年に新発売熟眠剤として新聞広告が開始され、約1ヶ月に1度の頻度で新聞広告が掲載されている。当初は「平和の眠り」というコピーと天使の絵がみられていたが、医師の指示を勧告する広告を経て、1949年12月には適正使用についての文章が広告に登場する。アドルムの広告がしばらくみられなくなるころから、ボノリン、レスタミンが不眠に対する広告を行っている。

ドリエルは2003年の広告開始から、関係法規等にとつた新聞広告である。

【考察】アドルムは、その目的外使用(濫用、自殺、他殺)が問題となり、当時の新聞にも関連する記事が複数みられる。そのために適正使用、医師の受診を促す文章が広告に掲載されたと考えられる。有効性だけ、あるいは品質保証を訴えることが多い当時の一般向け医薬品広告としては異例なことであった。ヒロポンやゼドリンの広告とは異なる内容である。

高度成長時代に入る昭和30年代以降、多くの製薬企業がマスコミで医薬品の宣伝競争を行っている。問題の発生を受けてからとはいえ、製薬企業が戦後すぐに精神神経用剤の「適正使用」勧告を行ったことは、時代の先駆けといてもいいであろう。薬物乱用の時代にも、製薬企業が直接患者に行えることがあることは現代も同じである。